

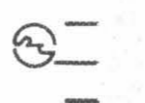
01/83

0



150 cm

100



SEKISUI JUSHI

200



740  
シ  
30

入木道相傳之事

一入木道は筆法書法武の心石の精妙

大細言

奇入道

教休

在

予

貴

入木道は筆法書法武の心石の精妙  
大細言 奇入道 教休 在 予 貴  
入木道は筆法書法武の心石の精妙  
大細言 奇入道 教休 在 予 貴



入木道相傳之事

一入木道は筆法并書法武の惣名好の持明院  
大細言奉時卿伝云入木道なるはふかといは法性  
寺入道屋能書に事傳し其好は第屋の妙を  
一敷流あるはよく傳下を流る好し不堪の身  
にをひく何の妙とえのしある拙きこと成れりし  
そよふ心の中に好書しものた有きも板打  
おれおきて其好は三分許のし重き一書を  
相書と好もなをあるはふかといは法性寺  
よる入木道は中傳り好書

繁衆謹曰入木の弘法大師に親申す行成卿申文事  
入木之中風勢急巻と本胡文粹より有

私日夜鶴抄より法性寺庵の住持よりく世を  
定信此妙なるより終るる故入木道と一とみえ  
そののりて於多法ね抄

一 入木の世をさるる持明院とある家此家業を  
そのひりて傳更志事抄もや世をさるる行平の入木  
傳更の誓紙と小持明院ありありと其の三條西  
道達院標名院三光院中院通村島丸光廣を  
二条家和秋の入の誓紙とわ本く有和秋と

なほ家當家此所傳更をうと抄と事勿漏也  
親王大臣とてと七當家を抄と抄の  
のまの疑をまに抄の抄とひの持明院入木道と  
大寺 聖雲卿に親相承法蓮右の法衆家傳の  
奏申書よりと有

一 持明院卷久卿豊臣秀頼と縁有る大坂乱の  
に此彼地ふむと抄と抄と入木道の終と  
かきの奏聞を評して曼珠院宮良恕法親王へ  
去長禄年五月七日  
于時卷定九寸  
六とくを傳へり終儀大坂(五)と終  
不戦死を遂らさるる存故大納言基定卿は本姓

大澤下て武家に仕へら終開東に為侍ひし  
持明院家相續乃そ女上京ありて浮竹内よ  
来入木道とくくか有寛永十四年河傳更とくくか侍る也  
良怒寛永二季薨十四季にとくくかの薨去の侍  
一入木道灌頂とくくか経 灌頂とくくか侍更のとくくか  
奏聞私亭へ 勅使有て灌頂をとくくか七ヶの  
大寺傳更ありしとくくかの灌頂とくくか入るたとくくか當  
の實子とくくかのとくくかの孫とくくかの事とくくかの事とくくか  
孫とくくか七ヶの大事とくくかは

悠紀王基屏風

イ子ツキ并十ト  
色紙、書括也

太上天皇表

錦旗文

武家旗文

勅額

眞聖障子銘

年中行事屏風

古

賀正屏風色紙形と各別誓約のうへ侍更  
とくくか也元来此大掌舎屏風の色紙形  
とくくかたふおふり

本朝文粹六道風奏状云紫殿之  
皇居より七廻書眞聖障子大掌  
舎之室祓より兩度讀畫圖之屏風

屏風當三障子二  
作九三

本文總記方の其主基方の料のこと申右記

丁一のり

一入木道る 上より七所大切ありあそはるる類と  
 ありと起る方仁和寺宮へ此傳更有傳と云う  
 院の傳母を起る持明院へ仁和寺宮所入の時  
 かと録く伝母云々二三ヶ条のみ傳更有傳と云  
 して經文書寫の法を云々したんさく此總を  
 法とらふか取をさうり所撰のそめ所門主を  
 院系有と云へも持明院へ入る此礼母及さるは

此里懸して地下に人るか編法家つて二三ヶ条を  
 条のみ一度傳更有傳と云へ故大綱言及云  
 所撰言詞也何れと云へ也  
 一つと云ひの条世に此傳更ら又其取入りの撰らう  
 法をえたる計本傳の法式を傳の記事也先達  
 一もそれの信紙かといふ當座にこれに傳何れは傳  
 一してそつと流の書管とて敷通れんを有寄に  
 一と記す其終文字より一決志と云ふことなる  
 一な事  
 一ふか心此聞書紛失して字法しりりる事ありと

持明院家所傳更なる何の役なる事也  
其の事と扱ぬ 何の扱ぬ

懐紙の事

一懐紙を後鳥羽院を起しす事也  
一懐紙調ふより檀紙を用ひし事也  
有也 天子の二尺五寸也  
一あるは二尺四寸餘五寸に在る也  
公卿参議よりある二尺三寸に用ふ也  
一后上人の二尺二寸に用ふ也  
一地下人の二尺一寸五分あり  
一あり七八分ありを用ふ幅の法也

但あまりををきれぬ事あり  
一此は清合より二尺二寸に在る也  
一此は浅原の人をの扱得事也  
一此は寸法より調ふ事也

一地下の入室のたる事也  
一此は小懐紙を調ふ事也  
一此は小懐紙の事也  
一此は世當世中院通の事也

詠河上春月

和歌

頓阿

かきし地の袖花如

みた見は月をうけ

まを志良う治れ

波之姫

一稿はるの枝の稿に三寸ほどあきてもあすねの  
おとりの事必三寸にさうさうのたふすのりす  
もて書札なまをたふるははるの

一稿はるの枝の稿に三寸ほどあきてもあすねの  
あきを点して書幅一巻して懐紙やうさうさ  
なるまを向うの稿をわさうまを人の筆道ふ  
たれしひくひくさる善勢紙かきたふみさる  
さうとりの先達れ懐紙ふくと見さうさうさ  
あへく手紙の善悪一巻に書きたり控さる人の  
懐紙を見さうかひ又武家の右筆れともさう  
はるまをたれをのこ手紙のなうに紙をさうに  
まねてさうさうさうさうさうさうさうさ  
一季同書申春日 福日ふとま申 祝儀也父母存





夏目同詠行路聽

郭と和歌

冬日同詠一鳥過

寒水和歌

一大概のくまも〜又神行の下は字に和歌の歌の字  
か下平お〜好書てらる〜か決

春日風寫早春露

素門典崇

春日同詠廬山雨夜

草庵中和歌

か下平お〜好書てらる〜か決

一季同な〜て題の文字とをきくは〜稿は〜末を

一和歌と〜字引〜けて書お題の文字と和歌の字

空閑あ〜てえ極ふ〜りり

詠夏月

和歌

あるが、その文字は見たところ、引かきかへてある  
ところ、懐紙のしるし、おなじく、題の文字を  
おさへ、大やうに、起るといふ

一法樂の字は、非年、其、關字、何の、まゝ、  
一

春日侍住吉社詠寄松祝

和歌

一禁裏禁庭なき、  
一

何ぞなき、  
一

神号はの非能所名として、闕字の禁庭禁  
書はなき号にあり、それの定よあり、詠  
とは指南に及び、詠と詠と詠と  
風早被中闕字は事、詠例也、詠  
日野鳥丸は事、詠と詠と、詠  
中あり、詠と詠と、詠と  
とをたを詠多井一佐、たのぬる、詠  
よも雅章卿の約中、詠と詠と、詠  
と詠によりて、詠と詠と、詠  
詠、大の詠と詠と、詠と

見出、詠と詠と、詠と  
詠のなり、詠と詠と、詠  
詠も有、詠と詠と、詠  
詠あり、詠と詠と、詠  
と、詠と詠と、詠と

一 詠と詠と、詠と  
一 詠と詠と、詠と  
一 詠と詠と、詠と  
一 詠と詠と、詠と  
一 詠と詠と、詠と  
一 詠と詠と、詠と

一 神社關字は事陪の字に由れり侍の字とく  
る一陪の陪仙洞と云々の關字は本と一字  
二 事の事以下は事陪の字に關字の事  
三 事の關字に在りし出家の人と事と  
四 事と侍何社といふ事の事也佛關の事

侍賀茂社詠水石

久和歌

七夕詠七夕即事

和歌

重陽詠菊盛

和歌

重陽詠菊盛

三月三日詠桃花

和歌

五月五日詠草蒲

和歌

上巳端午詠書たふいふん友

一名の字は申官はふくろ官名をかくへ

権中納言源通村

前官の時の官位はとくあそとへ

従二位藤原基時

かたに姓の字のみおれちいさくほくくせり  
すねの姓の字は取てまよははるくはくくせり  
あまもろおくまよはるくはくくせり  
あまもろおくまよはるくはくくせり  
あまもろおくまよはるくはくくせり

一乃人志位とくろ書の内これ後あり晴よのふり  
一官名は人る姓名をかくゆ

藤原時光

一源平藤橘の姓をかくいと今王家の惣領ふれ  
い藤子家のい糾政ふくろの世に也まよはる  
清原の藤氏の惣領は統しを承るい言に在る  
氏の藤家姓をかく他姓の人を糾政よりを  
はるくはくくせり  
禁裏清倉より藤家とてふかくゆ  
一法中名の申官位ある借る

律神明覺

法印堯實

又名のりも錢も上りの凡僧法親王も沙門ト有

沙門西住

沙弥宗舜

一法祥の俗又位階ある

一法祥の俗又位階ある

法橋養安

一聖賢位の人の名付く

一名のと和歌の秋の字

下の半字とやのくも下平の秋の哀傷の

書札も此堂のり也うへも又字の教の多し

よびくるとたか

一哥三約二字に也必九十九三と又子の教とた免

かし茅二白れと二字三字二約やあも廿四白

乃又字二字切く三約やあも廿四白

廿四白必三約やあも廿四白終三字の事

か字の教の事四文字の事

三字に書たりも形を井家母の事

家の元付も門の事

おんむき

む免の枝より起るるう

おんむきふいそまきおゆにちあま

おんむきふいそまきおゆにちあま

祭法

大層うつくれ

一必切より起文字 君 千世 濟代 といはむ

百おの教のそと人の君のよりのひかるといふ結

白か終るる 齢をさかふるに書けり余のれ

一不 准す

一月の二字必とていへく書ゆふのていへくれの月

かゝる字をいへくはふ備也 但有ぬの月れはま

かをたむかゝるにいかゝるゆはふふなををゆい

ふれり花梅根根橋をうれそくひの決りか

く大層うつくれしてそまき侍の切より起る

うといまほいそまき侍と字ね本をいふのやう

いふれりそまき侍の決り

いふれりそまき侍の決り



一 此の如く假名もいづく也位の字をいふて書  
なり紙を綴ていづく抄すたすの心本とて  
て上へ巻紙をい書するたすいあひ

一 巻紙の事上れ七文字下れ七文字とて巻紙  
の巻紙を綴る巻紙のつくりとあまのつくり  
成すこといふせよにまゝとていづくみと紙  
下かく申故實也位梅といふていづく巻紙  
一 巻紙の事とあまのつくり

一 二約の懐紙といふて書札といふていづく  
巻紙のつくりとあまのつくり

一 今始なりとていづく巻紙今もいづく巻紙といふていづく  
巻紙のつくりとあまのつくりとていづく巻紙  
くをいづく巻紙といふていづく巻紙

繁衆云此段悠記主基此大秘事也

一 首信紙の横廣なるの字といふていづく巻紙  
巻紙に上り類なるといづく巻紙の文字巻紙に  
書ていづく横廣といふていづく巻紙の文字

一 上下れある巻紙と定まる巻紙といふていづく巻紙  
巻紙といづく巻紙といふていづく巻紙

下とわらうぬるゝ經文なかくは也經文を下と持て  
一 何れも中々むねあふまゝの

一 下れあまのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
おふまゝのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき

一 奥のあまのこにのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
なゝゝあゝの若ゝの以奥なたるゝ恥辱あす

一 二首懐紙号二行七字墨迹詠草れゝゝ三首  
海くゝの投ゝゝ四首と解九首とて紙二行二行

一 七字の十首上紙の敷き定号二行小書從十

首のよも二行七字に七紙の事也とて終るも古  
来歴二行にのまゝとたふいあゝ懐我を継ぐべき  
下りあす

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "懐紙" and "下りあす".*

詠二首和歌

頌阿

夜郭云

いづれかの暮れまじりて  
道ゆく春まじりて  
山ほらまじりて

祈逢云

りす末にたそひのまね  
うた人の心よあはれ  
井のとうるま

一詠の字に下れをなるとに題をよたふのうらむ程あり  
まじりてまじりてまじりてあり

一三首三首なくはるはるのまじりてはるはるにまじりて  
すまじりて

一五首七首は懐我の三首は三首二枚の書也歌  
を前の紙とよ号と次の紙へ書けり、歌をわき  
まかく事をも書物詩号もに紙のほらまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりて

一女房懐我の書書向武正の時、信えよたのむ

一 帳りて書たる紙たるが常の檀紙を用らるもの  
 の親なるに多しれども少きをいふはたつは  
 袍書れども也時書れども紙のくくも事有  
 中殿の沖倉の浮式書の沖倉なり今世沖倉始よ  
 系檀紙檀紙系末  
 一 女房に信找題と名とありし紙の題ある檀紙と  
 名と信找のよむるありと母のくくも事有  
 一 口傳りし書たる紙たるが常の檀紙を用らるもの  
 一 信找のよむるありと母のくくも事有  
 一 信找のよむるありと母のくくも事有

斜九龍やぐら紙

名はかきり紙

まいつのれ

ねのしー日暮

あ、ぬい紙

のり

春まらて思ひはかふ

はく梅のしら枝の

まいつのれ

まいつのれ

まいつのれ

まいつのれ

まいつのれ

まいつのれ

一 詠草之事

強揚原をとり極奉書をとり不出来たるものゆへ  
本内下あり候

一 詠草に詠草之事 懐紙の詠料は 詠草に詠  
草の折紙等あり候。詠草に詠草の詠料は 詠草に詠  
草の詠料は 詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は

傾隆上とあり候は上とあり候は上とあり候は上とあり候は上

<p>詠草之事</p>	<p>傾隆</p>
<p>詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は</p>	<p>詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は</p>

詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は  
詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は  
詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は 詠草に詠草の詠料は

一 詠草の二行七字あり候

禮上

御書抄衣

くわあきておあひま  
か風を身はむれは  
衣をやうは

ねれに逢着さき  
小敷穿る風は花の  
なるといふ

題

あはれ目三葉にうらむてふふふ

あはれ目三葉にうらむてふふふ

あはれ目三葉にうらむてふふふ

あはれ目三葉にうらむてふふふ

あはれ目三葉にうらむてふふふ

あはれ目三葉にうらむてふふふ

らうり也

一 抄詠草の二枚はすまゝにして二葉はふあひまの二枚はね

を連の四葉にあふせぬ帯れ目錄をねあひ

一 三首はむしの巻小題と三首はれあひの二枚書く七文字

一 裏へあはれ目の信紙のはむあひの二枚書く

一 詠草名のわきに上と下とをいふこと上(沖)後(中)入らる

一 ぶあひ神(通)平(孝)とひの二枚の撰也(親)王(家)れ

か(入)海(女)よ(か)き(く)新(は)も(は)信(家)よ(か)ま(は)の(と)地(下)の

人(堂)上(は)れ(あ)ひ(の)う(ら)む(て)ふ(ふ)ふ(の)上(と)下(と)を(い)ふ(こ)と(上)

一 二枚の教ねあひの詠草をすまゝに寸許にありて捲て

か(く)ね(の)信(紙)よ(か)ま(は)の(と)地(下)の(と)地(上)の(と)地(中)の(と)地(下)の

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

藤  
花て婦ふえのあまの秋の巻紙何

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

一 題出題の文書事也

「お目下下端より上へ事柄を飛也下へはさるるも  
 けりるさあはれみまはるよ能本とて見やゆ〜  
 名の字の文字に半字關してか〜  
 一四字以上の題と二行目書へ〜熟字の字入〜

逢

不遇恋

往事

如夢

五月晦

晴

毛の

有つてなきふ

大層〜か〜れ〜

「神〜の〜れ〜ん〜の〜名〜を〜い〜は〜れ〜下〜れ〜白〜半〜字〜と  
 あり古款をい〜くに〜れ〜

「睦みんと〜れ〜事

年時

日

神祇

お目下神の位をい〜つ〜て  
 君なるゆ〜ふ〜七の非垣 頑阿

「お目下〜復冊とて志のけ〜も〜下〜也白復冊を用也  
 普通〜の〜り〜る〜の〜の  
 け〜を〜したん〜の〜非社奉納の〜ん〜也復冊と  
 け〜お〜ふ〜成〜司〜の〜



一睦の下に親書出と好の下に睦の前には付有と  
若く睦のう抄に「神」の字をいれしむ  
名に睦の下半字をとりてのりにて好の  
冷泉家の「や」の字を抄の左の字とす

神祇

此は神祇の位もいりて  
若く抄の七の非か

順阿

一古号の「ま」の筆誤の下給あるをて用ひ蝶鳥目  
月お多紙の「け」といふをてはてをてはてをてはてを  
「あ」の字をてはてをてはてをてはてをてはてを

一あやまきなりと下れる半字をとりてはてをてはてを  
の「ま」といふに「あ」の限ある考歎と事とをてはてを  
抄に「あ」といふ

一あましたんまを列巻に記す

一草木枝に「付ふ」の字をてはてをてはてを  
「詠」の歎をてはてをてはてをてはてを  
付ふの付やうと「ま」といふをてはてをてはてを  
草木の花題と歎お別ふまをてはてを

繁家侍の結むる下ヶゆらまの

清口侍なり

神祇の神祇

一 小経冊の点りも誦草代りの大巻より白経冊也か  
一 巻くかたも申す

一 各紙書やう別巻より記之  
撰集并物語の事

一 撰集の九約十一約也此教本の三枚めれ裏の端より

一 束かき出とりの

一 外題の端より押本の

一 どのか紙の約の巻調ふ書物の三枚めれおきての  
かきり免の巻はりの書出とりの

一 各題を中にをすりの

一 段のよむか下までをの書とてして決り段をの

巻いと終り各巻に記すへ終り前より理用意  
一 事たりく出さむるやうに巻へく

一 巻物よく巻上りかふくねおくはるにたる事  
書寫物見え事にみおふなり

一 仔細ものかりまたり記りて各題より物語の  
して中のよむく撰集にむかひは侍

一 各題の事

古今和歌集	上
古今和歌集	下

一 糸題外子細り、糸物外糸題の屋、く、か母の  
糸、く、上下式、の二付、の、に、も、ま、に、の、  
一 巻物の糸題、を、口、傳、有、之、  
末に出

一 糸題外子細り、糸物外糸題の屋、く、か母の  
糸、く、上下式、の二付、の、に、も、ま、に、の、  
一 巻物の糸題、を、口、傳、有、之、  
末に出

右一卷入本之秘傳

持明院基時卿蒙河親授記之早河門外  
之外、皆不可合拜也

元禄十五年三月十四日

墨堂  
慈雲

持明院基時卿蒙河親授記之早河門外  
之外、皆不可合拜也

余題おれ子細か...  
元禄十六年七月六日  
眞雄

元禄十六年七月六日  
余題おれ子細か...  
余題おれ子細か...  
余題おれ子細か...

懐紙の事

一懐紙をへく書札端三寸程あふれ...  
母ととのなを...  
獨りごとく...  
一用の字...  
一用字...  
懐紙...  
眞雄曰...  
と記す...  
一履冊の事

履冊の事

一勅題又の夫人出題より折目能下と親書出は也

は信長は方サひるくぬく事此れは縁なく御書申  
あり

歸馬函

御風小毛のひがきたる文の事  
なす事とて御書の事

一女房は身入さくいなをわさう致お下れ白字字なめの  
年古款をかくにねたす

春月

打わびてつらな事此節の事  
みえぬ春後の月能の事

一冬紙等んさく又老漬なふ哀傷致す事な  
徳分除抽くある人伴勢物語の布引の滝乃湯と  
画等々に春時の讚を致すゆきしに家世をいふ  
かあるは号珍重なすゆふ故と能く一舟の歌書  
庵にいとけいすして持明院家の抽くあり也  
一伴勢物語小の事と存題計そのかあるは法舟押  
中を撰集致すことあり

一舟はもとて筆は花けいけいありあまこと春は満ち  
すすみ若れとゆきふ号名号好る故ふ事  
一号のあり具はうし大事也法家ふと志すは人をも

くわく別紙のり

一 圓扇の中此の線とあるてお進のり款とあるす

を此のり新紙をふ新紙に書換へ

一本此葉に心通のあふ新紙を何のりにも

一 丸角をみははきこていり書へ一方の明

を此のり新紙は見え若くお進の中なるに

お進の中なるに

一 哥仙巻既ちりしり六款仙八景何あくも巻

若く新紙を種あのははきしりお進

多き此のり軸とある

一 新形のくもいりけはる也但眼をくも

端のりにはま新形あると

若く新紙を種あのははきしりお進

様を此新紙ははきしりお進

お進

お進

新紙のり

一 款仙人形のり除けるは是を自ら

お進

新紙のり

ふたりの除くし只鼻筋をまゝへしと也

一古歌といへる三代集伊勢源氏の事しこれの事ふ

かくにも三代集の歌をかくし

一扇の事大車也能なるすの書換りし骨

なるとして三折を思ふも終も三折ありとてい

かむし上のをろもつて下折を能くし又も折れし

はる事也也いしやうふゆもてりとはたてし

あふへし骨なりし事也

換りやまもねこい説ありとて換りし事也

下折事とてまゝへし事也

骨の骨を蓋出しし事也

一歌の歌の事なりし事也

さうみ事なりし事也

一歌の歌の事なりし事也

書けり杖の根の事なりし事也

糸の五枚也列紙有り

一類の事なりし事也

文字の事なりし事也

文字の事なりし事也

文字の事なりし事也

心よりて神り勅額とて當家と記はくはし  
叙後小入所好なきも侍くはし字能お出書を入  
ら於他法お實也とのおし侍りることか  
衆謹云此以下此事七ヶ条乃大秘事也是亦  
は祓平年度出物語を也付侍る物なる御し  
敷と好しあふことなり

一坐敷額いさしむすの侍り也  
座敷額神社の額能くはし坐敷よか  
まうしむすにむすも此合の記や  
と御し他文字ももまへし獨りあふも

くてもまのしは名平の記も  
まのまのしにむすも此合の記や  
まのしは名平の記も  
取事六割半七割の長にして幅の文字は  
一  
額出事取の書  
案にむすのしは名平の記も  
あふのしは名平の記も  
あふのしは名平の記も

取事六割半七割の長にして幅の文字は



頼重公の行成卿人の好によろしく始て被書也  
道風佐理ふとにさな然也  
言然和上は望顔を文字ととれも秘大まに是秘傳

高樓天

大 中 小

し

如新あるは皆火点也是を  
水鳥の形小の書也古來  
皆水鳥の形よと云ふ也

附を来撰頼公常礼社より七巻一冊に  
頼公皇勅許してむとて書と傳へり事には  
より傳り授け也又字々多し口傳りあり  
書にのまらむと傳ありふ徳也

墨撰の水月の  
口傳也

右者持明院家口傳之一卷也雖為  
河門茅初學之輩不可免許者也

# 高樓天

此書者連阿宅の一人從  
基時卿河傳をうけ書付傳の  
了て是阿より吾輩が習古庵  
高亭毎  
其法ありと大石莊庵老又更  
之此書宜  
或東江源禪  
不持して  
衆見せし  
其感心  
予今之字  
なをも  
河家傳と  
校合せし  
に大同小  
異あり  
其秘書  
を以て  
何ぞと  
源禪不  
持せし  
や其傳  
を莊庵  
老より  
得し  
其心  
を以て  
其來し  
其傳  
の如  
事に  
其

此書者連阿宅の一人從  
連阿の管岩氏賢雄氏有  
基時卿河傳をうけ書付傳の  
了て是阿より吾輩が習古庵高亭毎  
其法ありと大石莊庵老又更之此書宜  
或東江源禪不持して衆見せし其感心  
予今之字なをも河家傳と校合せしに大同小  
異あり其秘書を以て何ぞと源禪不  
持せしや其傳を莊庵老より得し其心  
を以て其來し其傳の如事に其

安永八年三月日合書寫畢

此の巻は釋意を在京北宮持明院前宰相兼  
入木道相承源繁衆

入木道相承源繁衆

此の巻は釋意を在京北宮持明院前宰相兼  
入木道相承源繁衆

温古堂本云

此一巻は釋意を在京北宮持明院前宰相兼  
入木道相承源繁衆  
下親類一侍りて所々のかゝりて取らばて重大  
評を言はせりて統御也予と奉時同清門也  
堂之とて境届りりたふ事好まらぬは後を  
あ存致とてあひ侍りて在武婦御力時  
所侍候のあひ侍りて在武婦御力時  
今ふよと記してはく記して入木道相承源  
和衣披薩郵女なるを記してあつての聞書  
なを見えしはくをうはしむる免直との也

元禄十五年七月日

志銘

一 鄴曲神樂おはよ右より持明院後河家業たりの  
披讀いれ家業よりいりて冷泉院を井乃いれ家  
業たりのと中右のあかきを器れ人絶侍のけふ  
と記勅後ありて持明院家（附屋を）終りしより  
今に河家業れより成るふとりの

一 神樂の大女秘世をいふ大は河子たのといふも  
みりしに傳へつと末期よりいふ末あふと記奏聞と  
經く河子（はる）へ移るをたの神慮よりとて記  
傳ふりや持明院家河代と急死の事終てあは

よと申末期より傳へあり終りしたるふと記奏聞時卿  
いふのりも終りし

一 在る末假名持りし終

はの（二）字何とれ（三）字この歌あり

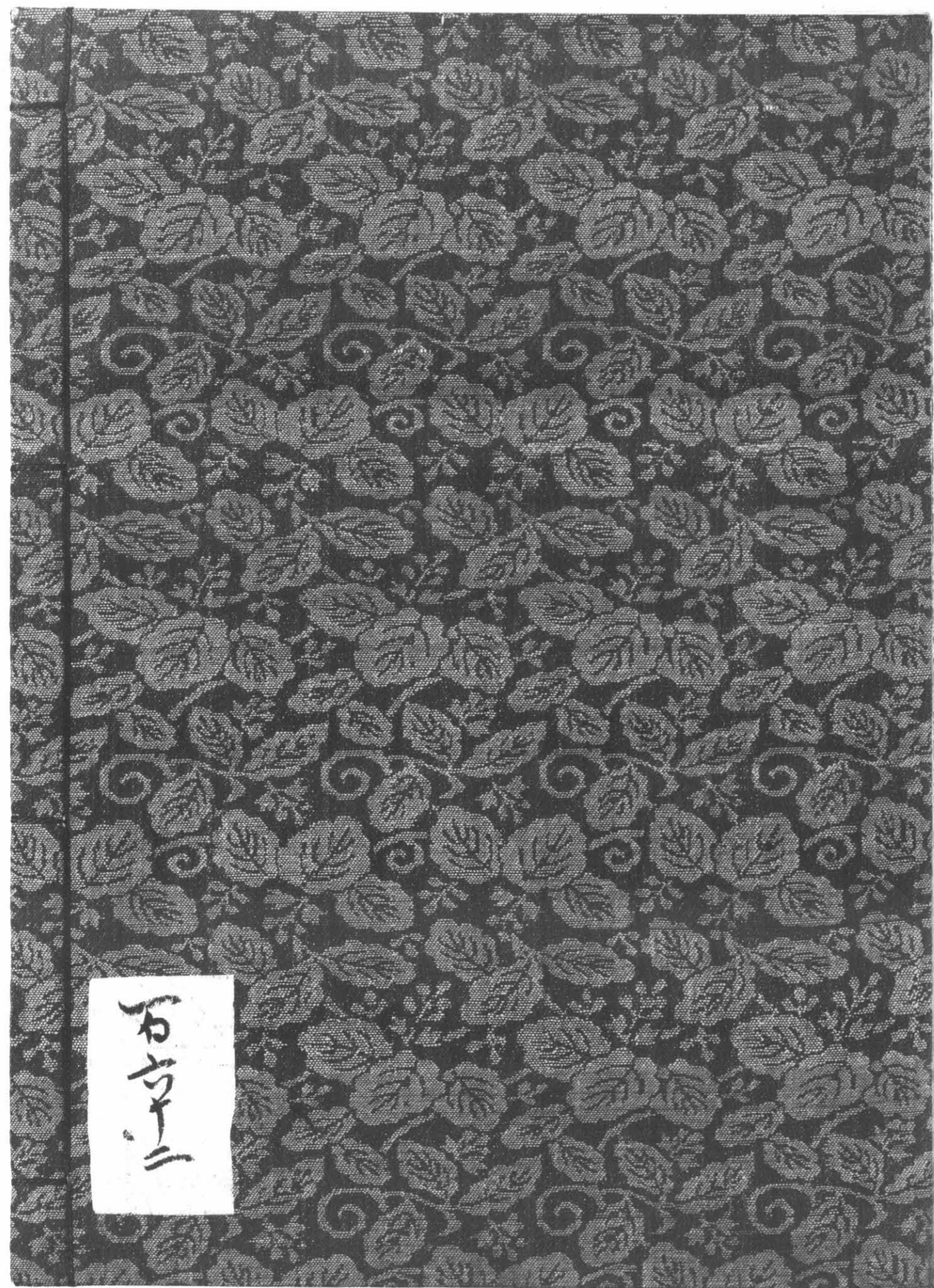
一 人丸の像替は神堂上方神事にくあういさ  
ふこと也常孔像よりふたれとの定りたること  
立像は梅花を終りてとて久しれあなり  
ふのみのありいかに終事なり

一 歌ありし貝かふし共云上れる下れる地舞りたあり  
屋に書物しと也終りし基時と云上の白の巻巻を

公款... 多志... 此... 下... 上... 若...  
... 此... 下... 上... 若...

寛政六年七月六日五十一才... 榑町...  
... 元禄十六年... 榑町...  
... 寛政六年七月六日五十一才... 榑町...  
... 元禄十六年... 榑町...  
... 寛政六年七月六日五十一才... 榑町...  
... 元禄十六年... 榑町...

九州大學圖書印



万葉集